

ハイデルベルク信仰問答より

問13

私たちは、自分で、それを償うことができるでしょうか。

答え

到底できません。反対に、私たちは日ごとに、自分の負債を大きくしているのです(ヨブ9:3、ローマ2:4-5、マタイ6:12)。

「罪の償い」とは、宗教上の問題として特化されるものではなく、私たちの日常の問題でもあります。私たちが誰かに対して明らかな罪を犯し憎まれてしまった場合、普通の人間の感覚ではそのままの状態でい続けることは苦しく辛いことでしょう。それでいて、完全な和解に至ることがどんなに難しいかも知っていると思います。自分が相応の償いをしたと思っ
ていても、一度失った信頼を取り戻すことはそう簡単にはできないからです。裁判の現場でも、被告に有罪判決が下され、原告に対して賠償金を支払ったとしても、あるいは長い刑期が言い渡されたとしても、それですべての問題が解決したとは言えません。失われたものを取り戻すことはできないからです。

神と人間の関係においても同様のことが言えるでしょう。しかも、はるかに深刻な問題^{はら}を孕んでいます。人間は神の御心から外れたことを自覚的／無自覚的に行ない、時に深い罪意識に苛まれ、時にまったく気づかずに(開き直ってさえ)います。そして、それらの罪を「できれば解決したい」と思っています。A. ペリーの解説を引用するならば、

「人間は神のために何かしたいと欲している。また、人間は自分の負債を支払いたいと願っている。このようなことは、『諸宗教』が人の心の中に生きつづける幻想である。なんとかして、すべての諸宗教が神に対する負債を完済することによって、人間に役立とうと企てている。」

そう、人間は見えない罪の問題を自力でどうにかしようとあがくのです。その「あがき」は無意識的な行動のうちに現れていることもあります。私自身も、過去に盗んだ「神のもの」を「返そう」「返そう」と努力をしていた時代がありますが、どんなに返しても「まだ不十分なのではないか」「神の怒りは収まっていないのではないか」という不安が残り続けました。おそらく、同じことを続けていたとしたら、死ぬまでこの問題は解決しなかったことでしょう。たとえ返し切ったとしても、それでも神と自分との間に真の和解は成立していなかったと思います。自分には、神に対して自力で罪の処理をすることはできないということを知らなくてはならなかったのです。

今日の問いに対する答えの中で「反対に、私たちは日ごとに、自分の負債を大きくしている」ということが言われています。ここでは、私たちが神に対して抱えている罪は、自分が認識し

ているものに止まらず、知らないうちに日々積み上げているものも含まれるということが示されているでしょう。私たちが返済する額よりも多くの負債が日々積み上げられているのです。A. ペリーは言います。

「『善き』行ないは全く無用である。それらは悪い行ないの埋め合わせにもならない。それらは帳尻を合わすこともできない。私たちの行為は、すべて呪われ汚れている。私たちはただ一つでも、純粋な行ないをなしえない。すなわち、ただ愛によってのみ動機づけられた、完全な、利他的な行為を生み出すことはできない。私たちが行なうことは、私たち自身の根深いエゴイズムと自負のしるしをおびている。」

まことに厳しいことが言われています。私たちの「善い行動」のうちにもどこか不純な動機が混じっているのではないか。自分でも気づかない心の奥底の思いがあり、神の目には隠すことができないというのです。

重要なことは、第一に、神に対して罪の埋め合わせをすることは不可能だという事実気づくことです。この認識は逆に私たちが解放へと導きます。もう自分でがんばらなくてもよいのだ…と一挙に肩の力が抜ける感覚を覚えるはずです。第二に重要なことは、神が私たちに求めておられるものが何であるかを知ることです。それは、「悔い改め」です。神の御前にへりくだり、自分が赦され得ざる者であることを認め、胸を打つことなのです。そのとき、私たちは知るようになるでしょう。そのような自分のために代価を支払ってくださった方がおられることを。その方によって、神に対する私たちの負債は永遠に思い出されないということ。私たちがおびただしい罪を償って余りある犠牲が十字架上で払われたということ。主イエス・キリストこそ、私たちの「義の衣」なのです。